

II 胸部CT検診の検査・読影技術の到達点

3. 日本CT検診学会とともに
— 職域低線量肺がんCT検診の経験より

中川 徹 (株) 日立製作所 日立健康管理センター

1992年春の日本医学放射線学会(JRC)胸部画像診断のセッションでは、いつものように熱いディスカッションが繰り広げられていた。なかでも、進行の時計が止まるほどの議論があり、孤軍奮闘、論陣を張っていたのは、放射線医学総合研究所(当時)の館野之男先生であった。「肺がんを早期発見するためにCTを検診に導入すべきではないか」「健康人への被ばくリスクを最低限に抑止する上でも、低線量・低被ばく量CT検診とするべきではないか」との主張は、当時は受け入れられるものではなかった。フロアの大多数の出席者から、「高価な装置が検診に使えるわけがない」「検診費用はいくらかかると考えるのか」「膨大な画像データを誰が処理するのか」「現状の胸部単純X線検査による肺がん検診を発展させるべきだ」「低線量のCT画像に意味があるのか」など、多くの反対意見が寄せられていた。時代とはいえ、先進的・革新的な意見がサンドバッグ状態で叩きのめされる状況を、卒後3年目の筆者はかたずをのんで見守っていた。

キックオフ

1993年に、「東京から肺がんをなくす会(以下、ALCA)」が高速らせんCTを導入したことで、低線量肺がんCT検診研究の第一歩が踏み出された。日本CT検診学会の前身となる記念すべき第1回の胸部CT検診研究会は、94年2月19日、胸部CT検診研究会・ME学会専門別研究会「循環器生理代謝イメージング研究会」として、東京・第一製薬ビルホール(当時)にて千葉大学医学部第三内科(当時)・増田善昭大会長の下、開催された。主題は「単純CTによる心血管系特に冠動脈疾患の診断」で、冠動脈の石灰化検出の意義を中心にディスカッションされ、この時には肺がん検診に触れられることはなかった。

第2回胸部CT検診研究会は95年2月18日に国立がんセンター中央病院内視鏡部(当時)の金子昌弘先生が大会長を務めて行われ、一般演題19題、特別講演に東北大学(当時)・久道 茂先生『主要疾患の疫学と将来予測』、シンポジウムで『高速らせんCTによる胸部検診の分析』が報告され、研究会の体を整えた。シンポジウムでは、肺がん・冠動脈石灰化・肺気腫の発見頻度、CTで発見されたそのほかの疾患、費用分析がテーマであった。このシンポジウムの特別発言として、ALCA(当時)の鈴木 明先生は、近年の結核の集団発生例を紹介しながら、結核対策における本邦の後進性を指摘した。高速らせ

んCTを胸部検診に導入することによって、結核発症予備軍と呼ぶべき病態を解明し、結核対策の一つとして感染源を効率的に減少させることに資するのではないかと、そして、これが医学教育、日常臨床、臨床研究の場に、結核症に対する関心を再喚起するインパクトになることを期待すると述べた。ただし、このことは安易に先端の医療機器に頼り切ってしまうということではなく、1枚の単純X線写真をていねいに読影することが大切であり、検診に対する取り組みの姿勢についても襟を正す必要があるのではないかとコメントされた。

任意型検診として

日本CT検診学会は、黎明期を初代理事長の館野先生をはじめ、多くの泰斗の皆さまの深い洞察力と、現在の医療事情にも通じる卓越した先見性に支えられながら発展していくことになった。この25年間、技術部会、精度管理部会、COPD部会、循環器部会、肺がん診断基準部会、CAD(コンピュータ支援診断)部会が整備され、精力的に活動してきた。実際の肺がんCT検診も任意型検診として、職域や地域の検診、人間ドックのオプション検査として徐々に拡大していった。

われわれが担う職域低線量肺がんCT検診も、日本CT検診学会とともに活動してきた。ここで、職域低線量肺がんCT検診の経験の中で最も印象の深い症例を供覧する。症例は、66歳、男性であ